

消防トピックス

消防団ファーストエイド研修を実施して

三重県伊賀市消防団

1 伊賀市について

伊賀市は京都・奈良や伊勢を結ぶ大和街道・伊賀街道・初瀬街道を有し、古来より都(飛鳥、奈良、京都など)に隣接する地域として、また、交通の要衝として、江戸時代には藤堂家の城下町や伊勢神宮への参宮者の宿場町として栄えてきました。このような地理的・歴史的背景から京・大和文化の影響を強く受けながらも独自の文化を醸成してきました。

また、伊賀市は伊賀流忍者発祥の地として、忍者の歴史や精神の継承や、その認知度を世界へひろめるべく忍者を活かした観光誘客や、まちづくりを進める目的で平成29年2月22日(忍者の日)に「忍者市」宣言を行い、平成29年4月28日には「伊賀忍者」が日本遺産に認定を受けました。

さらには、寒暖の差が激しい伊賀盆地特有

の気候と豊かな自然が育んだ伊賀牛、伊賀米などの素晴らしい食材や、ユネスコ無形文化遺産に登録された「上野天神祭のダンジリ行事」をはじめ、国指定の伝統工芸品の「伊賀焼」や「伊賀くみひも」、俳聖松尾芭蕉や横光利一のふるさととして広く知られており、歴史がおる地域となっています。

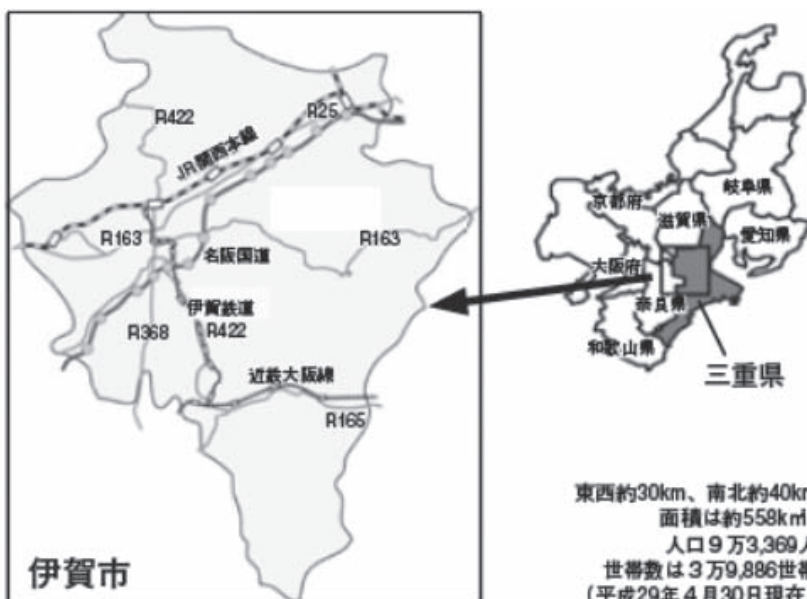
2 伊賀市消防団について

伊賀市消防団は、1本部、10分団、39部で構成され、条例定数は1,510名で、平成29年9月末現在の団員数は1,490名(うち女性団員18名)です。

平成16年伊賀市消防団発足当初は、合併前の消防団から1団6方面隊と編成していましたが、平成25年4月に方面隊制を現在の分団・部組織としました。

毎年4月に、辞令交付式や新入団員の訓練礼式や、ホースの取扱いなどを行う初任者訓練、林野火災などを想定した夏期訓練を実施しています。

また、秋には南海トラフや直下型の大規模地震や自然災害に備えて、市や県が主催する総合防災訓練に参加し、災害情報収集訓練、避難訓練、初期消火訓練、救出・救護訓練などを実施しました。女性部



は、一人暮らし高齢者宅や地域公民館・保育所等へ防火啓発訪問、応急手当の普及指導などにおいて活躍しています。

3 訓練実施の経緯

平成29年7月に「ダニエル・カールのききたい！消防団」の取材を受けた際、消防団員等公務災害補償等共済基金様から今回の「消防団員の公務災害防止研修」の案内をいただき、かねてより団長は「自分の命は自ら守る。安全確保し団活動をする」を基本理念としていることと合致しているのでぜひ受講したいと手を上げさせていただき開催することとなりました。

4 研修の概要

平成29年10月1日(日)に伊賀市消防本部3階研修室を会場として、厚生労働省DMAT事務局長の小井土雄一先生、厚生労働省DMAT事務局員の小森健史先生、河寫讓先生による、セーフティファーストエイド研修が行われ、消防団員45名(内女性部5名)が受講しました。

災害医療概論では、消防団員が活動中、訓練中に発生した事故の事例で、「絶対安全な地域は無い、徒歩や車の移動中にも事故は起こる」とお話がありました。もし負傷者が出た場に居合わせたとしたら適切な処置が行えるよう啁嗟の対応をするためには、このような研修受講を積み重ねる事が大事だと思いました。そして傷病者への初期対応に加え、安全確認、感染防御、迅速な通報及び救急隊への申し送りの大切さを再認識することができました。

前半の災害医療概論では安全(Safety)の3つのS!自分(Self)・現場(Scene)・生存者(Survivo)を覚えておくよう安全確保の重要

性について学びました。

その後の傷病者対象の手順で、災害現場で患者搬送中に一人が崖から転落した想定でロールプレイが行われました。演者は要所で助言を受けながら安全確認、感染防御、迅速な通報、傷病者の評価の手技を順に行いました。その中で、自己紹介や励ましというメンタル面の対応も含まれており、声掛けをする事の大切さ、手袋着用で感染防止、脈の取り方、エマージェンシー・バンテージでの止血、固定を学びました。



患者搬送中を想定したロールプレイ



エマージェンシー・バンテージでの止血



頸椎保護の指導

後半の災害時におけるメンタルヘルスケアについての講義の中では、スフィア・プロジェクトという国際的な最低基準があるということ、東日本大震災での支援はこの最低基準を満たさなかったという事実を知りました。被災後の生活の中で、与えられるものだけではなく本当に必要としている物がある、なかなか言えない・・・その希望に対応することが出来るようになるにはどうしたらいいのか？この研修を通して女性団員として出来ること、心理的応急処置(PFA)を学び、配慮し、話を聴ける環境、次につなぐという手助けをして行けるようになりたい、そして日常的に配慮をした言葉がけをするように心掛ける事で、非常時にも活かせることができるのだと思いました。



5 今後の取組

今回の研修を開催するにあたり、受講者40名設定でしたが、受講希望者が多く各分団から4名の40名に加えて女性部5名の計45名、見学者18名が参加しました。

研修後のアンケートでは、「実技をしながらの講習が分かりやすかった」「災害出動時の安全確保の大切さや災害時におけるメンタルヘルスケアの支援者への心がけが理解できた」等、団員の今後の活動に活かして行ける

と思いました。そして「多くの団員に今回の研修を受講してもらえた」「継続して受講したい」との意見があり、来年度もぜひ実施したいと思っています。

最後に、団員がいきいきと研修を受講できたのは、DMAT事務局の皆様、実習のお手伝いをいただいた松阪市民病院の谷口先生、伊賀市消防本部の救急救命士の皆様、そして研修を主催していただきました消防団員等公務災害補償等共済基金の皆様のおかげです。

ありがとうございました。

